

少年は海へ

久保 喬著 出口正明絵



少年は海へ

久保 喬著 出口正明絵



913.6 久保 喬

少年は海へ

新日本出版社 1974

206P 21.5cm (新日本創作少年少女文学26)

久保 喬
く ぼ たかし

1906年、愛媛県宇和島市生まれ。現在、日本児童文学者協会会員、日本児童文芸家協会会員。「赤い帆の舟」(偕成社)で第13回日本児童文学者協会賞、「ピルの山ねこ」(盛光社)で第14回小学館文学賞をそれぞれ受賞。著書にこれらのほか、「ネロネロの子ら」(東都書房)「海はいつも新しい」(理論社)「風とハンドルのうた」「少年の石」(新日本出版社)「火の海の貝」(国土社)「南の島の子もりうた」(岩崎書店)など多数があります。

出口 正 明
で ぐち まさ あき

1932年、北海道函館に生まれ、夕張で育つ。21歳で上京し、鉄工所、造船所等で働きながら「灯画サークル」で油絵を学ぶ。日本アンデパンダン展、平和展、リアリズム展に出品。現在、日本美術会、京浜リアリズム美術家集団所属。絵本の作品に「くわどろぼう」「とおいへいったたくちゃん」、さし絵に「ばけねこたいじ」(いずれも岩崎書店)がある。

新日本創作少年少女文学26 少年は海へ

1974 年 7 月 20 日 第1刷発行

1975 年 6 月 20 日 第2刷

著 者 久 保 喬

画 家 出 口 正 明

発行者 松 宮 龍 起

郵便番号 102番 東京都千代田区富士見 2-13-14

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(265)7006 振替東京 3-13681

印刷 光陽印刷株式会社・製本 古賀製本株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

*もくじ



クリ舟の千太

5

さけぶ海

33

いるかの童子と大津波

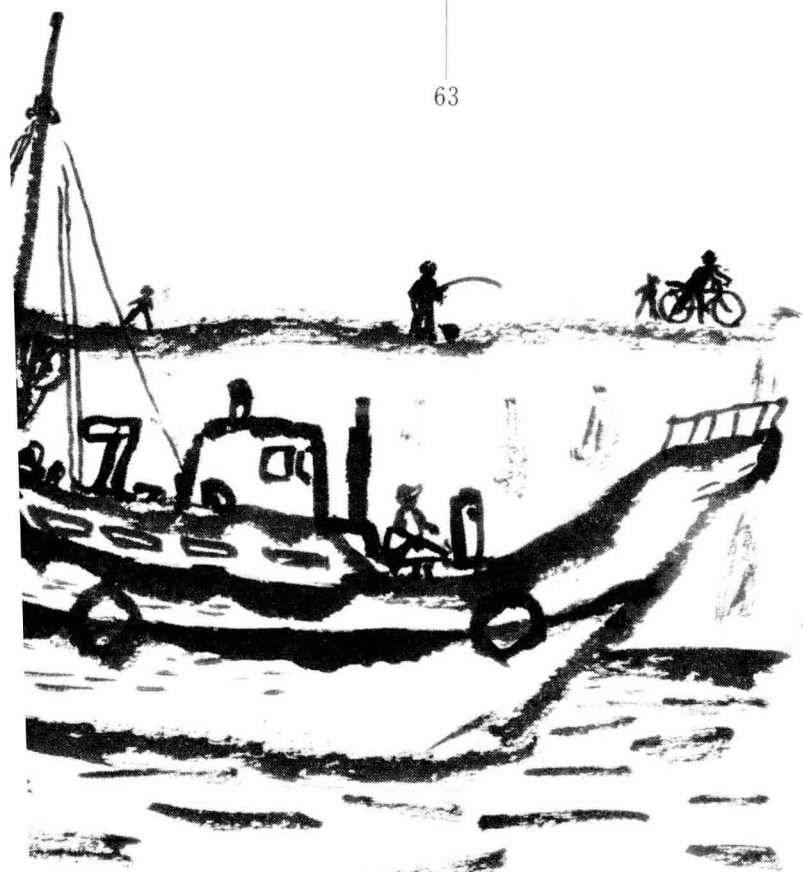
63

おれは海賊

87

家船の子ら

107



名人漁師とキカイアミ

131

海の底の鬼^{おに}

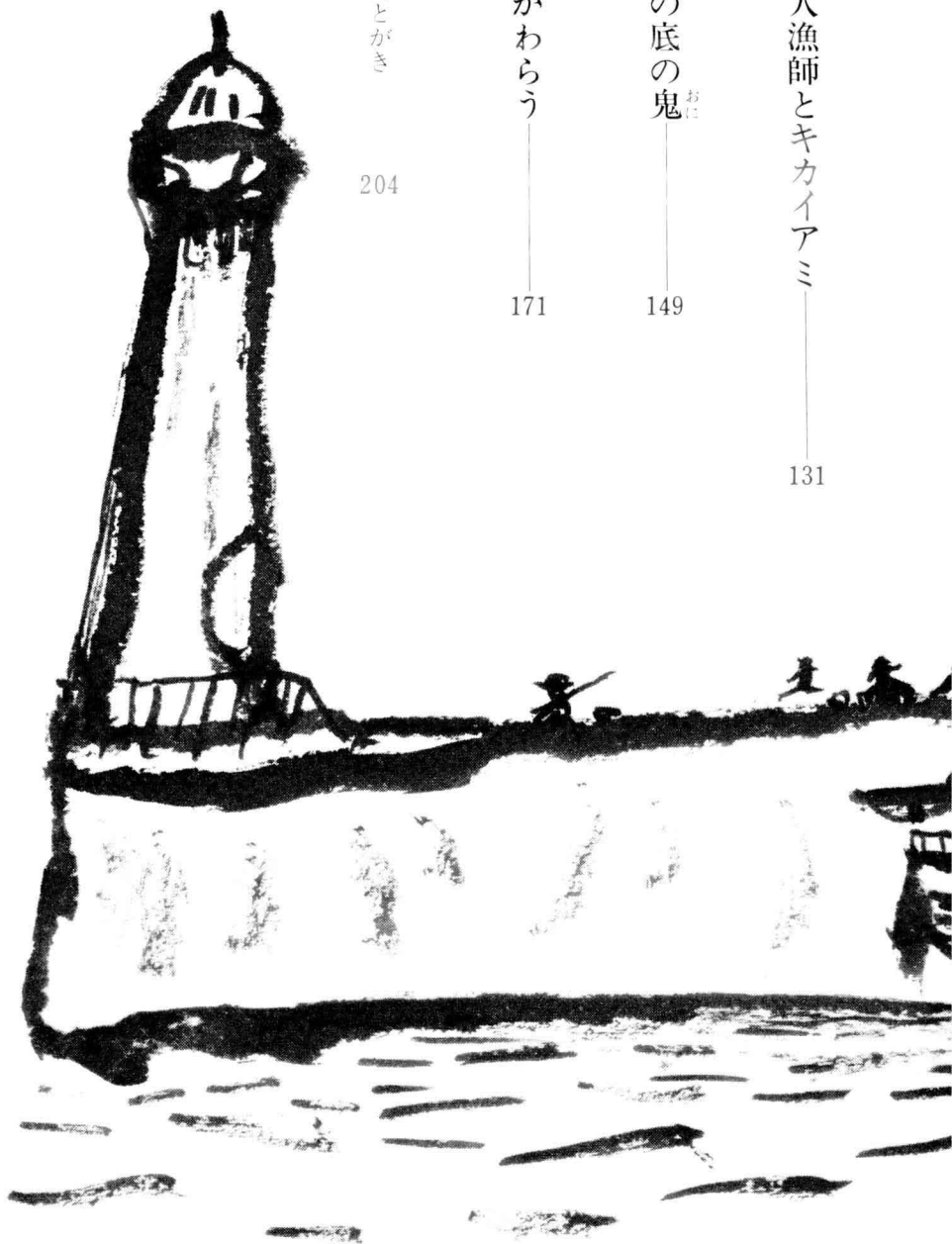
149

海がわらう

171

あとがき

204



装丁・さし絵

出口正明

で

ぐち

まさ

あき



クリ舟の千太

1

「うっふう、こわいやつがきたぞ——」

と、千太せんたは小舟こふねの上で、ろをもったまま立ちすくんだ。

まわりから、むらむらと、まっ白なまものまもののようなものが
いっぱいおしよせてくる。

——しまった、沖おきへこなければよかった——

ちかづいた村祭りむらまつりのてんま競走きやうそうのけいこのつもりで、浜はまか
らひとりで舟をだして、こいでみているうちに、ふと、

——ええい、このまま、よそへいってしまおうか——

と、いう気持ちになってきた。

「おとうのおらん海なんかで、くらしとうない。」

千太の父は二年まえ、マグロとりの船でかけた南洋で、台風にであって海にのまれてしまった。それからのちは、ちかくの海ではそぼそと一本づりをしているおじいと、魚やノリの加工場の手つだいをしている母との三人ぐらし。

浜ではわかい連中が、おかの仕事のほうがええと、ぼつり、ぼつりと、村からきえていってしまう。どこかのおい工場地帯の海辺から、赤茶色ににごった潮が、このごろは、このあたりまでおそつてくることもある。

——海も、漁師も、どうなるかわからん——

と、小学生の千太もそんなことをおもうようになった。ちかくの町に住んでいるおじはこのまえあったとき、うちへきたら来年からの中学もだしてやって、そのあと、おじがやっている自動車の修理工場^{じやうくるのしやうりこう}で働かせてやるといった。

その町の港まで、このままで、んまをこいでいこうかなどと、ぼんやり考えながら、ろをおしているうちに、はっと、気がついたときは、すぐまわりの海の上いちめんに、もうもうと、白いキリが流れてきていた。

「こりゃあ、いかん。」

うしろの浜も、むこうの岬^{みさき}も、その白いまくのなかに、すっかりかくれて、なにもみえなくなつて



しまった。

「沖でキリにであうとこわいぞ。」
と、いつかおじいちゃんがいったことば
を千太はすぐにおもいだした。

まっくらな夜の海でも、星のあ
かりや、燈台^{とうだい}などで方角はわかる
のだが、キリのなかでは、昼間
でも船のりはめくらになる。

千太はろをにぎったまま、うご
けない。

このまま、なにもみえないのに
こいでいて、もし外海^{そとうみ}へでしま
ったら、はてしもない太平洋で、
こんな小舟のまよい舟は木の葉^はの
ように流されていく。二度と浜へ
もどってくることはできない。

あわてた千太は、舟の上の小さなイカリをもちあげて、どぼんと、海へなげこんだが、

「あかん。」

首をよこにふった。もうこのあたりは海が深くて、こんな小舟のイカリのつなは底まではとどかない。

——じっとしていても、このまますこしずつ流されていってしまう——

キリはいっそうこくなつてきて、舟のそばの海面も、すぐまえの舟のへさきもみえなくなった。

「おーい、おーい」

大きな声でよんでみたが、どこからも、ほかの舟のこたえはない。舟をとりまくキリのかべ。もやもやと、まっ白なもので、目も耳もすっかりふさがれてしまったようだ。

千太は、ろをいれたまま、舟のともにかがみこんだ。

いろんなことが頭のなかにうかんでくる。

もし、このまま浜へかえれなくなったら——浜ではおれがいなくなったことが、いつごろわかるだろうか。おじいはいきようは村の祭りの世話人のあつまりで漁にはでなかったので、浜のてんまがいていた。それにのつてでてきたのだが。でも、みんながてんまがないことにきづいて、さわぎだし、捜査の船をだしてくれるまでには、ずいぶん時間がかかる。

そのころには、もう、この舟が、広い外海のほうへ流されてしまっていたら、とてもみつかりっこ

はない。

まっ白なキリのなかに、千太のあほう、と、泣きながらどっている母の顔や、おじいの顔もみえてくる――。

どれくらい時間がたったかわからない。キリのなかでいつまでもすわりつづけているうちに、千太はふと、うとうとと、目をつぶりかけた。

――ねむったら、あぶないぞ――

ぐっと肩をちぢめたとき、きゆうに、舟のへさきのむこうに、ぼーっと、黒いのがみえてきた。

――岩だっ――

おもいがけない、陸のそばまできていたのかと、千太はいそいで、ろをまわしたが、舟は、ざざーっと、岸の砂地^{すなち}へのりあげていった。

千太は舟のへさきから、びよいと、下へとびおりた。

キリがすこしはれてきて、すぐむこうに、みょうな形のものがみえる。水の上に一ぴきのワニがねそべっているような、細長い平たい舟。

――おや、あれはまる木舟だ――まるい大きな木の幹をくりぬいた舟。いつだったかいった町の郷土館^{きょうどかん}でみたことがある、土のなかからほりだされたおおむかしの舟――でも、あのおおむかしの舟は木

がくさってぼろぼろになっていたが――

いま目のまえにういている舟の木は新しい。舟べりがぬれたままひかっている。木のかいも二本みえる。

千太が首をかしげていると、

「ヤタ、ヤタ――」

と、よぶ声がある。

ふりむくと、舟のよこに人があがあらわれた。ぼうぼうみだれた長いかみの毛、こげ茶色の顔、土によごれた手足ははだかで、胴にだけ、なにかけものの皮をきている。背の高さは千太とおなじくらいだが、顔つきは女の子らしい。

「ヤタ、ヤタ――」

と、またこちらをむいてよぶ。千太はまわりをみまわしたが、じぶんのほかにはだれもない。

――おれをよんでいるのかな。ヤタとはだれだ、おれをだれかとまちがえているのだろうか。だが、あいつ、みなれない子だがなあ――

その子は、片手にさげていた、海からとったばかりらしいタコの足をひきちぎって、生のまま口にいてたべはじめた。

――ほう、やばんなやつだぞ――



きらっとひかるけもののような青い目で、千太をじっとみつめている。

——おかしいなあ、あの子は、どんな子なのだろうか。あのあやしいまる木舟なんか、のっていたのなら、あの子もやっぱり、おおむかしの海からきたのだろうか？　ここはいい、どこなのだろう？

千太はちょっと気になって、すぐうしろの波うちぎわをふりむいた。だが、そこには、いつのまにか、じぶんがのってきたてんまがなくなっている。

あわてて、きよろきよろみまわしたが、やはりどこにも舟はない。

千太はきゆうに不安になって、からだをすくめる。

さっきろをこいでいたとき、ぬぎすてた服を舟においてきたので、千太ははだかのままだった。

「ヤタ、ヤタ——」

と、また毛皮の女の子がこちらへむいて、いっしょにこいというように手をふった。千太がおもわずこっくりとうなずくと、女の子は、浜のむこうのこんもりしげった森へむかつてあるきだした。千太もそれにひかれるようについていった。



いつのまにか、千太は「ヤタ」とよばれると、「おう」と、こたえるようになった。毛皮をきて、草ぶきの小屋のなかで、石のオノや石のツチなどを使ってくらしているおおむかしの部落へきてから、どれくらいときがすぎたか、日がたったかわからない。すっかりもう、部落の子のヤタになった。いや、じぶんは生まれたときからヤタだったような気がする。

ヤタには親はいないので、若者たちといっしょの小屋でくらしている。

コン、コン、コンと、小屋のそばでは、きょうもわかい男たちが、まる木舟をつくっている。

いままでの部落の舟の二倍ぐらいもあるようなまる木舟。こんな大きなクリ舟づくりははじめてなので、部落じゅうがさわいである。

「あんなものをつくっても、マジの神にやられて

しまうぞ。』

と、年よりたちはこの舟づくりに反対だが、でも、わかい連中が、

「これをはやくつくらないと、いまにみんながかつゝえてしまふ。こまるときがやってくるぞ。」
と、いつている。

このごろ、部落のそばの海の魚や貝がめつきりとへってきた。

うしろの山へ狩りにいっても、やはりえものがすくなくて、小さなウサギや山鳥くらいがとれるだけだ。部落じゅうのものが腹をすかせている日がおおい。

それで、岬のむこうの海へ漁場をひろげていってみようと、わかい連中がいろいろした。

すると、いちばん年よりのヨダというまじない師は、

「いや、岬のむこうへいくのはあぶない。あそここの海のマジの神がおこりだす。」

と、いつて、みんなをとめる。

そのマジの神というのは、岬のはしの海のなかに住んでいて、部落のものが祈りをする、海の漁のえものをゆたかにしてくれる。でも、人間が岬のそばへくることはよろこばない。岬をまわっていかうとするものがあると、たちまちうず潮をまきおこして、舟をのみこんでしまふ。また、この海の人食いザメはマジの神の使いをしている。それで、ほかの魚やイルカはとってもよいが、サメだけはころすと、神のばつをうける。いつでも神をおこらせると、部落は不漁になるといふ。